

雷神と山神の絆

百田 弥栄子

（一）

1

神話伝承は一つの大きな曼荼羅世界を構築している。一話一話の神話伝承がその時々語り手の安直な思いつきで語られたものではないとするならば、そこにはきつと祖先の知恵を潜ませた思索的で途方もなく広い世界があるのに相違ないからである。思えば私たちの心は天より高みに上り海の底よりも低きに達し、宇宙の果てまで自由に広がっていく。この「心」は、平面ではなく、広大無限の球形をしていることだろう。いうまでもなく神話伝承の世界もこの「心」に内在する。

もちろんここでいう「伝承」とは、口承書承の神話故事叙事詩等ばかりか、踊られ舞われ歌われ、纏われ被られ戴かれ、切られ描かれ織られ刺繍され刷られ彫られ、更に村の祭りで行われる種々の儀式儀礼行事等も含む。有形無形に造形され創造され表現されるすべてである。それらの丸ごとの営みを、私は〈伝承曼荼羅〉と名づけた。そしてそれらを読み解く早道が

口承書承の神話故事である。

そこで伝承曼荼羅をみると、曼荼羅の核心にオンドリ・メンドリの姿をした雷神（天神）がおられた（両性具有）。私はこれを〈オンドリ雷神〉と表しているが、この雷神が曼荼羅世界にその全能の力量と哲学をくまなく放射して、すべての神々を曼荼羅の駒絵の中に固定している。二十年來の持論である。

この伝承曼荼羅の世界には、英明な祖先の子孫に伝えるべき知恵がそっくり詰まっている。ましてその知恵は、ただか私たちの世代で使命を終えてしまうような貧相なものではなく、遙か未來の子孫に向けていつまでも発信し続ける性質をもつ。伝承曼荼羅は雷神の理念や哲学を常時人々に伝達し、人々の願いも神々へ伝達する、そんな宇宙大の発信と受信の装置であった。

2

〈オンドリ雷神〉は太陽神であり【図1】、天地を開いた鍛冶神であり万物を創造した創造神であり、作物の種をもたらし



〔図1〕太陽の〈オンドリ雷神〉
連環画「高辛と龍王」(倉族)
『中国神話故事大全』1990 浙江少年儿童出版社)

それを豊作にした豊穰神（穀物神）であり、弱者を扶け悪者をくじく善神であり避邪禳災と疫病駆除の至高神である。そしてなによりも人類の祖を授けた祖先神であり始祖神であった。

この雷神は「この世は働き者で心清らかな人類で満たされるべきもの」という確固とした哲学をもち、「そんな世の現出こそが真の豊饒である」という理念をもっている。思えばそれこそが祖先の心底にある究極の願いであり、それはまた私たちの明るい未来図にほかならない。神話学は未来学なのである。

ところで雷神

は神の世のことは二の次にしてこの世のことはかり心にかかけ、何事か起つた時にはゴロゴロと駆けつけて来てくれる。それでも（天の一日地の一年）（この世の一年間という長さの時間が、天上界ではたった

の一日に相当する）という時間の法則があるから、雷神が三日寝てしまうとこの世は三年間もの日照りに襲われる。そこで雷神が寝込んでしまわぬように、祖先は面倒なほどの節日（祭り）を設定した。

実際それは有効に機能しているが、それにつけても天は高くて遙か、その上この世もなかなか広い。この世のすべてに目配りする（オンドリ雷神）は一時も休む間がないことだろう。けれどもそこは知恵深い祖先のこと、鍛冶の権化の観音を良き援助者として登場させたことは、すでに別稿で論じた。⁽¹⁾

加えて活躍するのは山神である。時として雷神に成り代わる目覚ましい働きもする。山神は雷神との間に、雷神とその他の神々との間には決して認められない特異で神聖な絆をもつ（観音を除いて）。両者には多くの共通点があると同時に対立点も有する。この対立性は、なにより両者の不可分の関係を鮮明に表明している。そこから、従来からの持論の「山神はこの世における雷神の理念の具現者」という命題が導き出されるのである。

本稿は雷神と山神との共通点と対立点を明らかにして、この命題を導き出した道筋を示さんとするものである。自ずから日本の山神との異同が表われるため、中国の「まれびと」来訪神は実は山神ではなからうかとする持説の補強になれば幸いであ⁽²⁾。

神より広い土地を管轄するなどともいうものの、中身は同じか緩慢な境界があるだけのようである。

私は従来からそれらの代表として「山神」を用いているが、事例として挙げる場合にはその事例の呼称を尊重することになっている。

4

一九九一年十一月二十三日に広西壮族自治区金秀瑶族自治县の山深い六巷郷に花藍瑶（ヤオ瑶族の一族支）の門頭村を訪ねた折、雑木林の中のひとつきわ高い杉の木の間隙に小さな杜王廟がたたずんでいた。相金徳氏（花藍瑶、郷長）に「この杜王は土地神と解してよいか」と問うと、「それでも良いが、ここでは山神土地という」というお答え。そしてすぐに、

これは「村庄杜王」（村の杜王）という兄で人畜を護り、遙か向こうの畑には「田頭杜王」（田畑の杜王）という弟がいて、作物を護る。

と付け加えられた。この村は村人も作物も家畜も杜王兄弟に護られているのだった。

日本では、春と秋に山の神と田の神の交代、もしくは去来が行われるという信仰が広くみられるという。けれども中国では、そのような事例を聞かない。田畑には田畑の神が、山には山の神が、どれほど小さな区画でも一定の土地がありさえすれば、そこにはその土地（山林、地形、地層）を司る山神がおられる。「棄

頭土地」は村の土地神、「本家土地」は某一族の土地神、更に「廟門土地」とか「花園土地」とかのように。他所から出張して来る山神の援助を頼む要はないし、第一どの山神も自分の管轄地の経営に精一杯である。

なお、山神はその土地によって大樹（龍樹、神樹等）やうつそうと茂る森、洞、崖等であったり、「石から生まれた」という神話伝承群が語る通り石であったり。大岩、卵石、直立した石、男性器に似た石、乳房に似た石、三つ石【**図2**】、まか不思議な形の石、それに彩色した塑像等多様である。その在所は見聞によれば山頂



【図2】三つ石の山神（杜王）
金秀瑶族自治县六巷郷の上古鎮への道沿いにて
（1991年11月21日）

や大樹の根元、大岩の下、村の入口、辻、丁字路、墓地等であり、川のほとり、それでもできれば大樹の伸びる所にあった。水辺の大樹が立つ場所に神聖な石を置けば理想であるらしい。

(二)

最初に「オンドリ雷神」と山神との一致点から始めたい。取り急ぎ確認すると、

(a) に「鶏形、鳥形」であること

「オンドリ雷神」はいうまでもなく鶏の姿【図3】。大山の頂や大樹の樹冠部、柱の先端、屋根といった高みは雷神の玉座である。「オンドリ雷神」のムスメの天女たちはしばしばメンドリ（白鳥）となつてこの世の水辺に現れ、ひとしきり沐浴して天へ帰って行く。その際、肩や上腕、脇の下に翼を挿して飛来し、抜いて水に入り、再び挿して飛び去る。

一方山神はさまざまな姿にしる、そこに翼で飛翔する姿をみ



【図3】大地を水底に沈ませる〈オンドリ雷神〉
（挿絵『苗族史詩』洪水の章）

ることができる。たとえば『苗族史詩』⁽³⁾の「兄弟別居」の段は、

雷公（雷様の意）は龍や虎、人等多数兄弟でこの世を分配して西天を得た。高い空を手に入れた。／雷公が天に行く時、土地爺爺が松明で照らした。雷公が忘れた緞子の座椅子を、土地爺爺は担いで後を追った。

と歌い、「日月鑄造」の段では、

聡明な土地爺爺、足に翼が生えたように、たちまち天に上り、日月が動かぬようにする手段を、天神と共に考えた。／土地爺爺が河を首にかけ井を頭に戴き、星を袖に釘づけして手に持ち、日月を肩に担いで天に上って行った。

と歌い、また雲南省楚雄彝族自治州大姚県の彝族の「黒木越と色絡米」⁽⁴⁾は、

色絡米という娘が（馬に揺られてお嫁入り）した先の貧しい狩人・黒木越は、実は土主（山神）の息子で、左右の腋の下に三本の白鳥（はくちよう）の羽毛が生え、三拍すると空を飛ぶことができる。

と語っている。山神も天を飛ぶ。

(b) に「小さ子」であること

「オンドリ雷神」は鶏卵に籠る「小さ子」である。瞬時に大きななるにしる。天女も龍女も鶏卵に籠る「小さ子」である。

一方、山神にも鶴髪・童顔（白髪頭に童顔）という形容がついて回る。神話伝承で「鶴髪童顔の老人が現れて……」のように表現されていたら、それは山神（もしくは観音、まれに雷神）

の変じた姿と解される。

(c) に「住民票は西」のこと

雷神の本籍地は天にあり、山神の本籍地はこの大地にあるのもとよりだが、住民票を見れば共に「西」にあるようである。

雷神は前述の『苗族史詩』によっても「西」の天に住民票を置く。〈オンドリ雷神〉が東から昇る太陽を呼び出すには、やはり西の方角にいろのが理に叶う。

そして「金銀歌」の段では、

土地神は村の西に住んでいる。

とも歌い、雲南省保山県の彝族の叙事詩「金盆地」⁽⁵⁾も、

永昌(保山の旧称)盆地が龍のしわざで洪水。雲間から神が降臨、その神は稲藁の縄で山を背負っている。左足は瓦馬龍洞盆地に着いたのに、右足はまだ西天にある。ところがオンドリが鳴いた(夜明け)のに驚いて西山の下に戻ってしまった。人々はそこに地母廟を建てた。

と歌う。住民票は西であった。

だから西は神話世界では「日の落ちる所、穀物の粒は柿の実ほどあり、穂は馬の尾のよう。そこで人々は西への移動を開始した」とか、「西では金鶏が飛び回って上手に畑を耕し種をまく所」とかのように語られる。「西は陸地に近い」という観念もあって、雷神も山神も何事かあったらただちに出勤できるように、西に頑張っている。

(d) に「共同の親権者」のこと

〈オンドリ雷神〉と山神とはカエルというムスコ・ムスメに共に親権を持つ。神話伝承は「鉄馬銅牛を駆って颯爽と敵を撃ち破るカエル息子」は誰であろう天神の息子であると語り、そしてまた山神の息子であるとも語っているのである。

雷神も山神も人類に始祖を授け、子のない夫婦に子宝を授け。共に始祖神であり、祖先神であり、産神であった(e)。

その他にも両神は(f)水をコントロールして水難旱難を防ぎ、(g)すべての邪気災厄疫病を祓い、(h)五穀の種を授け、(i)五穀豊穣と六畜繁殖を保証し、(j)悪龍妖魔を退治し、(k)村の平安を加護し、(l)避邪の宝刀宝剣宝斧を持つ等、多くの点を共有する。そして両者ともに犯しがたい神聖さに包まれているのである(m)。

そのため、雷神祭祀と山神祭祀とはほとんど同等に考えられている。年の変わり目に強く意識され祀られるのは、雷神と山神である。私の見聞からも、彝族の松明祭りや、壮族の蚂蚱節(カエル祭り)は雷神を、苗族の端午節や水族の端節は山神を、各々祀ってから新年の行事に移る。「雷神祭祀と山神祭祀は同じ」と雲南省の布朗族はいうし、四川省の羌族も「山神を祭祀する時には必ず天神祭祀もする。祭山会は祭天会ともいう」⁽⁷⁾。

このような基本的な営みでの多くの相似は、〈オンドリ雷神〉が山神と深い絆で結ばれていることを示す。他の神々との間には決してみることのできない濃厚な関係である。

(三)

では〈オンドリ雷神〉と山神とは、どのような点で対立するのだろうか。その第一は、

〈オンドリ雷神〉の鶏嫌い ↑ ↓ 山神の鶏好き

である。

〈オンドリ雷神〉は鶏の姿をしている。雷神の最強なことは古今東西知れわたっている。闇にのさばっていたものの、けどもは〈オンドリ雷神〉のたつたの一声で雲を霞と消え去る。

ところが、〈オンドリ雷神〉の鶏嫌いは音に聞こえている。だから雷神の住処があるとされる土地では、村人たちは雷神の怒りを恐れて養鶏をしない。

湖南省湘西土家族苗族自治州鳳凰県の王岩村（苗族）は養鶏しない村だった。一九九八年八月二十二日にお訪ねした龍成宗氏は「この村が雷公洞の上にあるから」と説明され、

ある年、私が子どもの時分、医者だったおじいさんが病人を治したお札に一羽の鶏を貰った。おじいさんはむげに断るのは悪いので貰ってきたが、持ち帰るわけにもいかず、とりあえずあそこの向かいの山頂に置いてきた。すると雷が傍らの大樹に落ちて、鶏籠は真つ二つになった。

と話された。鶏嫌いの〈オンドリ雷神〉は養鶏どころか、鶏一羽の持ち込みすら許さない。

ちなみに日本の天神信仰は、そのそもそにも雷神信仰があって、鶏は避けるべき存在になっていると聞く。

二神の嗜好（好き○、嫌い×）

	鶏	塩	鉄
雷神	×	×	○
山神	○	○	×

あつてこそだった。

山神は常に鶏の動静に注意を払い、一朝事あれば天の雷神の元に飛んで行く。

〈オンドリ雷神〉は徹底した鶏嫌い、それに対して山神は鶏好きであつた。

(四)

〈オンドリ雷神〉と山神の対立点の第二は、

〈オンドリ雷神〉の鉄好き ↑ ↓ 山神の鉄嫌い
である。

〈オンドリ雷神〉は誕生時こそ〈小さ子〉であつたとしても、〈天の一日地の一年〉という時間の法則通り、たちまちにして巨人になる。鶏卵のような混沌をエイッと鉄斧を振り降ろして天と地とに分け、金銀で日月を鑄造して天に掛けることなど造作

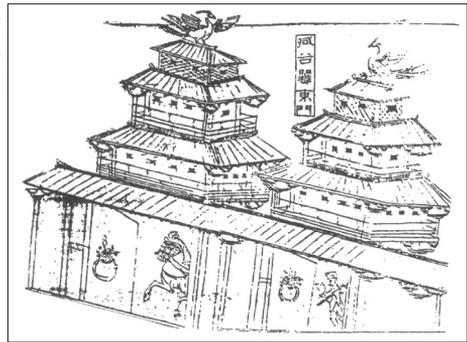
もない。雷鳴稲妻と同時に大山を真つ二つにすることも朝飯前の、偉大なる鍛冶神である。

それならば雷神の体重はいかばかりか。神話は「ちよつと停まるとお山が沈むほど」の超重量で、「あわてて飛び立ってようやく停まったのは鉱物資源を豊富に埋蔵する鉱山だった」と語る。たとえば雲南省大理自治州の賓川県に聳える鷄足山は海拔三二四八メートルで、原生林に覆われた鉱物資源の宝庫。雷神がようやく翼を休めたのはこの鷄足山であったと、「鷄足山の由来」は告げる。

盤古も超重量の天神である。河南省の最南端、南陽市桐柏県にある盤古山は、海拔四五九メートルの盤古の居住地として名高い聖山。実は盤古はこれより前に近くの山に腰を下ろしたが、そのとたんに山がひしゃげてしまった。それで「盤古はここから西に少し行った山に坐った。それが今の盤古山である」。この盤古山は金銀銅鉄等を埋蔵する鉱山で、とりわけ金は全国第一というお山。山頂がひしゃげてしまった山は歪頭山と呼ばれている。もちろん盤古も鷄卵から誕生した。(オンドリ雷神)と同等の天神である。

雷神は鉄鍛冶の権化として鉄を好むのはもとより、自ら銅鉄にも優る体躯であった。

したがって雷神の停まる山頂や大樹の樹冠部、柱の先端等の玉座は、(オンドリ雷神)の超重量をらくらくと支えられなければならない。単にそこらの大山や大樹、ポールではないから、



〔図4〕 函谷關東門の金鷄（漢代）
〔王子今 門祭与門神崇拜〕1996 上海三聯出版社

〔阿苦世命〕（世々代々生活が苦しい村の意）は、

山の上のこの村に、龍王の戦馬で一日八千里を走るといいうわさの名馬がいる。麓の漢族の首領が伝え聞いて「龍馬を捕えよ」と命じる。龍馬は龍が淵のほとりで人馬に囲まれると、淵に跳び込む。首領は「一と月以内にこの山の地脈を断て」と命じる。地脈を掘るも、翌日にはまた元通り。麓の人々は首がとぶのを恐れ、夜も地脈の辺りを見張る。真夜中、山神が龍王に「わしは少しも怖くない。ただ鉄釘を打ちこまれたらおしまいだ」と話す。翌日人々は鉄釘を埋める。掘られた穴は復元できなくなる。

名馬を捕えるのに、地脈を掘るのは奇想天外かも知れないが、

念のため〔図4〕。

それに対して山神は、一本の鉄釘でも恐れる鉄嫌いとして知られる。もとより地中の金銀銅鉄を管轄しているにせよ。鷄身（9）の雷神が鷄嫌いであるのに対応して。一例を挙げれば、雲南省大理自治州漾濞彝族自治县鷄街の彝族の

伝承曼荼羅では馬はしばしば地脈(龍脈)に添って山をかけ上り、場合によって天までかけ昇る。この首領は名馬が地脈に潜んでいるとにらんだ。地脈は山神の地盤。山神にとつて地脈に鉄釘を打ちこまれるのは致命傷だった。

〈オンドリ雷神〉は鉄好きに対して、山神は大の鉄嫌いであった。

(五)

〈オンドリ雷神〉と山神の対立点の第三は、

〈オンドリ雷神〉の塩嫌い ↑ ↓ 山神の塩好き

という点である。この場合の塩は岩塩のこと、したがって山神の管轄。

なにしろ鉄が一番嫌うのは塩気、鉄に塩は相性が悪いこと並び無い。したがって鶏嫌いの〈オンドリ雷神〉は、たまたま招待されて訪ねた家の食卓に塩を加えた鶏肉料理の皿があったひには、悲鳴をあげて天に戻るや、ただちにこの世を水底に沈ませる大洪水を起こす。それほどに怒り心頭である。

前述の養鶏をしない王岩村では高台にある磐座のような大岩に土地廟が祀られている。龍成宗氏によると、「土地菩薩はここに村人を護つていて、大旱魃には雷神祭祀をしたそうである。雷神祭祀と山神祭祀とは混在していた。その雨乞い祭祀は、

日照りの激しさによって幾つかの村、もしくは郷ほどの単位で寄付をつのり、村ごとに二人ずつ代表を出す。この代表は心根の良い人に限る。雷神の好みだからね。村人から選ばれ

た心のきれいな代表たちは土地廟に集まって二頭の煮豚を捧げる。その鍋には塩をいれてはいけないので、代わりにトウガラシを入れる。おしゃべりするのは禁忌で、とりわけ塩、^塩といつてはいけない。雷神は塩を恐れるからね。

と説明された。雷神も山神も心のきれいな人が好みである点は、「この世は働き者で心清き人類で満たされるべき」という〈オンドリ雷神〉の哲学に寄り添う。「早魃や病気などで雷神祭祀をする時には牛や豚の肉に塩を入れて煮てはいけないし、周りの人々はおしゃべりしてもいけない。ましてみだりに^塩とか、鶏^鳥とかを口に出してはいけない」という所もある。雷神祭祀には塩は禁物であった。

〈オンドリ雷神〉の塩嫌いに対して、山神は大の塩好き。それは山神よりむしろ「社王」とか「社王の伝説」とかのように「社王」を好んで用いる伝承群に顕著で、とりわけ西南部華南部でほとんど揺れがなく語られている。

皇帝(盤古、国王、地方長官等)が春社(誕生日、皇帝の下向等)に宴会を催す。食卓には山海の珍味が並ぶ。皇帝は大満足で、臣下や客人たちに向かって「どの料理が一番おいしいか」と聞く。客たちは口々に料理の名前を口にする(氣難しい皇帝の氣質を恐れて皆押し黙る)。そこへシェフ(料理人、社王)が料理を運んでくる。シェフは即座に「塩です」という。これが皇帝の逆鱗にふれてただちに首をはねられる。その後の料理はまるで砂を噛むよう。皇帝が厨房の者を呼

びつけると、「前任者が塩を入れたために首をはねられたから、塩をいれなかった」という。皇帝は深く後悔し、シエフを「社王」に封じる。

皇帝が非を認めたこの日は立春後の五番目の、戊つちのえの日だった。五行では「土」に当たる。中国では広くこの日を「春社」(二月社)、立秋後の五番目の戌の日を「秋社」(八月社)として、土地の祭祀、五穀神の祭祀が行われている。人々はこの日社壇に行くと、線香をあげ紙銭を焚き、肉の供物にはわざわざひとつまみの食塩をのせるのを忘れない。社飯を食べる前に、まず塩水を飲むとする所もある。

幸い私は(社王は塩)という伝承を、大瑤山で採集した。一九九一年十一月十二日のこと。広西壮族自治区金秀瑶族自治县六巷郷の門頭村(花藍瑶)で、胡漢光氏(師公シイゴン、位の高い巫師)、老芸人(民間の芸術家、村の知識人として尊敬を集める人)から伺った「社王の故事」である。

盤古が石を産んだ。盤古の産んだ子は真ん丸な石だった。盤古は困って、夜中にひそかに道端に置いた。数日して母牛が通りかかると、この美しい石に気づいて嘗めてみた。それはおいしかったから、母牛は思わず丸のまま呑みこんでしまった。不思議なことに母牛は身ごもり、月満ちて塩を産んだ。牛から塩の子が生まれたのだ。盤古はこの塩を持ち帰って育てた。ずっとたつて、塩は人々と五穀六畜を司るようになった。牛はそれ以来、石を避けて通るようになった。おしまい。

ついに(社王は塩)であるという伝承に巡り合えて、私は欣喜雀躍した。社王は塩好きのほずである。ご自身が塩なのだから。それはまたご自身が鶏身である(オンドリ雷神)が鶏嫌いであるという点とメービウスの帯であり、(オンドリ雷神)が塩嫌いであるという点とも響き合う。

結局のところ(オンドリ雷神)には塩無添加食品を差し上げ、山神には塩添加食品を差し上げるのが筋だった。

(六)

二神の職責分担

天上界	雷神
地界	雷神・山神
地下界	山神

(ここでは視点を変えて、(オンドリ雷神)と山神の天上界、地界、地下界の三界における職責の分担をみてみたい。

(オンドリ雷神)は本籍を「天」に置いたまま、むしろこの世の「地」において、至高神としての職責を全うしようとしている。山神も、言うまでもなく本籍は「地」であり、この地において職責を果せようとする

めている。山神は、加えて「地底」においても余人をもつて代え難い重大な任務を帯びている。一例を挙げれば、陝西省の「社王」の物語の「閻魔王はシエフだった」⁽¹²⁾は、

料理上手な閻楽が皇帝のシエフになる。皇帝はある日閻楽に、「この世で一番おいしいものは何か」と聞く。「塩が一番」と

答えると皇帝は怒り、ただちに閻樂の首をはねる。それ以来まずい料理ばかり。皇帝は後悔し、閻樂を「塩王」に封じる。こうして塩王という贈り名(諡号)を賜った閻樂は、地獄を司る閻魔王となる。

という物語。閻樂は「社王」ではなく「塩王」に封じられたが、一群の「社王」の伝承と同じモチーフ。社王とおぼしき「塩王」は地下を司る閻魔王(原文は閻王)になった。なお塩^{イェン}と閻^{イェン}とは同音である。

これは決して稀少な事例ではない。私も大瑤山で閻魔王となった「社王」を採集したからである。一九八八年三月二十四日に金秀県長洞郷の三角村という山子瑤(瑤族の一族支)の村を訪ねた折、李家行氏(農民)から伺った「塩を供えてお弔い」(吊喪齋塩)で、盤古王の誕生祝いに山海の珍味が並び、客たちは褒めたたえる。ただ秦将というシエフが「塩こそ味の源」という。

盤古は聞きとがめて首をはねる、翌日並んだのはまずい料理。料理人たちは訳を話し、「王が善悪の見境もなく真実を言った秦将を殺してしまった」と訴える。盤古は誤りを認めて秦将を「社王」に封じて村々に社廟を設けさせ、春秋の二度の社日に祭祀をとり行うように定める。

ここまでは従前の「社王」の物語に同じ。ところがこれにはその先があった。

首をはねられた社王は、冥界十殿閻魔王の第一の関所において、冥界の王道を司っている。死者は道師に導かれて社王の

前に出ると、まずここで神判を受ける。もしも無実ならば靈魂はつつがなく冥界に行くことができ、死者の親類も食塩で精進齋を終えることができる。こうしてこれは習慣となり、代々受け継がれていった。

語り手の李氏は、この伝承にまつわる次のような習俗もあると前置きして、「葬儀には親族は死者を納棺するまで靴や帽子をとり、椅子に坐らず、肉や脂っこい料理は食わず、茶碗や箸も使わず、髪を梳かさず顔も洗わず、まだいろいろあるけれど、とにかくひたすら死者を敬い、死者の恩に感謝の念を表すことが大事。二、三食分の塩を捧げることも忘れてはならない。この故事はそのことを語っているのだよ」と、説明された。

中国には死者が出ると必ず土地廟に報告に行き、祠堂の祭祀や墓参り、墓穴を掘る時には山神を祀るという習俗がみられる(祭后土)。思えば墓地も山神の管轄下にあり、それに山神は祖先神でもあった。

地下界の閻魔王に変じた山神は、死者が生前心清らかな働き者であったかどうか神判を下す。山神がゴーサインを出すとすかさず(オンドリ雷神)にバトンタッチされ、死者の靈魂はつつがなく祖先の集う所(西天・北・山の向こう、このずつと先の地等)へいざなわれるのである(開路鶏、領路鶏、度関鶏)。水底が天に通じているという思想と同様に、地底も天に通じていた。

(七)

ここで改めて〈オンドリ雷神〉と山神をみると、(m)の〔犯しがたい神聖さ〕が秘める〔庶民性〕という共通項も窺える(n)。

一目瞭然なのは山神である。山神の在所は山頂や大樹の根元、大岩の下、村の入口、辻、丁字路、墓地等の地にぽつんと立つ、石積みで囲んだような祠【図5】。それでは余りに質素と思われ

るかも知れないが、たとえば毛南族の「社の祭り」⁽¹³⁾が、玉帝に社王に封じられてこの世に遣わされた社王は、日差しと雨避けの麦藁帽子を買って、三百六十ある毛南地域の村々を一日一村ずつ見回った。暗くなる

と、村はずれの岩の下で夜を過ごし、そこで人々は、その大岩の下に廟を建てた。廟の中で麦藁帽子を被り砂埃にまみれている石像は、社王の化身である。

と語るように、山神はこの一帯だけでも三百六十もの村々に祀られている。いちいち壮麗な廟を建てるわけにはいかないし、第一それは山神の望むところではない。山神は謙譲の美德に徹した庶民的な神様であった。

重要なのは、この庶民性は決して山神の神格を損なわないという点であ

る。人々が節日や慶祝に、重病人の魂を呼び戻す時に、死者の報告に、葬儀の日に、真つ先にお参りするのには山神の元である。山神廟の石囲いには指一本触れてはならない、落葉が積っていても払ってはならない、正月に総出で掃除して、それから鄭重にお祀りするという厳重な禁忌を守る村さえ見聞した(王岩村等)。

〈オンドリ雷神〉は言うまでもなく光明照り輝く太陽神。雷神の前ではたとえどれほど壮麗な廟を建立したとしても、チャチに見えるのだから。

の折、人々は争うように〈オンドリ雷神〉の姿を村の中(西、中央)や家に飾りベッドに飾り身に飾る。それを雷神は人々と共に心から楽しんでる風なのである。祭りは一様に「娛神節」(神を楽しませる祭り)であった。

さて、「雷神の鶏嫌い、塩嫌い、鉄大好き」と「山神の鶏好き、塩好き、鉄大嫌い」は、彼らの公認されたアイデンティティーである。そして雷神は天上界と地界を、山神は地界と地下界を、担当している。互いに二つずつの世界の経営に協力し合いつつも、全責任を負うのである。この両神の職責の絶妙なバランスの上に、神話や信仰、習俗等有形無形に造形され創造されたありつた



【図5】大崖の前の山神廟と童顔の山神(土地) 湘西州鳳凰県の山江村への道沿いにて(1998年8月24日)

けが有機的に合体する伝承曼荼羅が構築された。

以上のような伝承曼荼羅から、私は「山神はこの世における雷神の理念の具現者である」という発信を受けとめた。そこで「葦と五徳と来訪神 (二二)⁽¹⁴⁾」で、

年の変わり目の雷神の訪れを、雷神の理念の代行者である山神の訪れを、人々はどれほど待ち望んだことであろう。それとも山神は人々の旧年の災厄を祓い子宝が欲しいという願いを適える力量に不足があつて、神話伝承世界が構築する曼荼羅世界にはただの一度も登場せず、素性の知れない、異郷から来る異装の異人神をを迎える要があるというのならともかく、山神にはこれといつて過失がないどころか、これまで重大な職責を果しおおせてきた。それならばこの日に人々の歓声に包まれて迎えられるのは山神であると、伝承曼荼羅は伝えているのである。(略) 山神にしても、年の変わり目という重要な節目に村人全員の前に現れて、村人の願いをつぶさに聞いて回る任を負つていよう。と述べることとなつたのである。

注

(1) 主に「鷄身の雷神から観音への展開―観音の限りなき鷄神志向を満たして―」『民間説話―日本の伝承世界―』一九八九 世界思想社、「伝承曼荼羅の見取り図―観音を巡つて―」『説話・伝承学』第十号 二〇〇二等。なお、

私が〈伝承曼荼羅〉から学び取つた構造や主題、命題、法則、哲学、理念等につきその論拠を示すべきところ、余りにも大量なため、それは拙著『中国の伝承曼荼羅』『中国神話の構造』や拙論に譲ることにしたい。

- (2) 『西南中国の来訪神―新年の子宝祈願―』『昔話と年中行事』一九九五 三弥井書店、「葦と五徳と来訪神 (三)』『アジア民族造形学会誌』第五号 二〇〇五等
- (3) 馬学良・今日訳注『苗族史詩』一九八三 中国民間文芸出版社
- (4) 『黒木越与色絡米』『山茶』第五期 一九八九
- (5) 『金盆地』『山茶』第三期 一九九二
- (6) 雲南省編輯組『布朗族社会歴史調査 (一)』一九八一 雲南人民出版社 七七頁
- (7) 当該書編審委員会『中国各民族宗教与神話大詞典』一九九〇 学苑出版社 五二五頁
- (8) 『鷄足山の由来』『鷄足山の伝説』一九八五 雲南人民出版社
- (9) 馬奔欣『盤古之神』一九九三 上海文芸出版社
- (10) 『阿苦世命』『山茶』第六期 一九八六
- (11) 石啓賢『湘西苗族実地調査報告』一九八六 湖南人民出版社
- (12) 『閩王原本是厨師』『民間文学』第四期 二〇〇〇
- (13) 『祭社』『毛南山郷風情録』一九九四 四川民族出版社
- (14) 同 (2)

(ももた・やえい) / 中日文化研究所